

キリスト教と科学 - 新しい関係を求めて -

京都大学
芦名定道

1. 問題提起（何が問題か）

宗教と科学との対立？

皆さんは、「宗教と科学」と言われてどんなことをイメージするでしょうか。ガリレオ裁判やダーウィンの進化論のことなどから、宗教と科学の対立をイメージする人も多いかもしれません。しかし、今日ここで話ししたいと思うのは、この「常識的な見方」を一度は疑ってみる必要があるということです。

最近、ガリレオ裁判やダーウィンの進化論論争については、実証的な研究がさかんに行われてきているのですが、その研究成果の結論だけをのべるならば、従来、宗教と科学の対立の実例として考えられてきたこれらの出来事が、実は宗教と科学との対立という問題ではなく、たとえば、ガリレオ裁判の真の争点は聖書解釈をめぐる論争であり、裁判を左右したのは、ガリレオを取り巻いていた政治的対立であったのです。コペルニクスもケプラーもガリレオもニュートンも、近代科学の創始者たちはすべて、実を言えばそれぞれなりに熱心なキリスト教徒だったのであり、彼らは、キリスト教と対立するなどまったく意図していなかったのです。

先ほど朗読していただいた詩編は、そのまま、ケプラー、ガリレオ、ニュートンなどの近代科学を作った科学者の言葉と言ってもよいものであり、実は人類は長い間、宗教と科学とは調和すると考えてきたのです。この詩編は、古代イスラエルの人々（知恵文学）が、神の創造した天地、大空と大地と海の中に見事な規則正しさ秩序を見出し、それを創造した神の偉大さを讃美するという内容のものです。近代の自然科学者は、ただ単に自然現象に興味があったのではなく、神が創造した自然世界に神の偉大さを科学的に発見し、それによって神を讃美することを意図していたのです。

では、どうして「宗教と科学の対立」という見方がこのように普及してしまったのでしょうか。ここに考えるべき問題点があるように思われます。

おそらく、この対立という見方が普及したのは、そもそも聖書とは何かについて、進化論者も進化論者を批判した信仰者も誤解があったことに原因があるように思われる。天地創造の物語を、生物についての科学的知識を与えるいわは生物学の教科書のようなものとする時、科学的に進化論が正しいのか、創造物語が正しいのかということになり、進化論者は進化論が科学的に正しく、反対の立場に立つ人々は聖書が科学的にも正しいと、言い合うことになるわけです。

しかし、こうした議論は聖書についてのまったくの誤解に基づいています。本日のわたくしのお話で、とくに強調したいのは、天地創造物語は科学思想ではない、聖書は科学の教科書ではないということです。進化論と創造論との対立は誤解に基づく不幸な対立と言わざるを得ません。

では、創造物語のポイントは何でしょうか。天地創造の物語は、光の創造（光あれ）か

らはじまり、人間の創造でおわりますが、全体としてみる時、この物語は人間が生きている世界を一つのパノラマのように描き出していることがわかります。高い建物の最上階から、まわりをみわたして、遠いところから順番に、自分の立っているところへと順に絵を描き、世界全体を描き出しているといった感じです。

その中心メッセージを取り出すならば、人間は一人で生きているのではない、人間は多くの他の生き物と共に、それらに依存しつつ生きている、そして何よりも人間は神に絶対的に依存することによって、人間らしく生きることができる、ということです。つまり、ここにはとくに進化論に対立する内容は存在しません。わたしたちにとって大切なのは、人間は与えられた環境の中で様々な生き物との関わりの中で生きている、人間は他に依存し、生かされて存在している、という共生する人間という人間理解を読み取ることなのです。

2 . 宗教と科学の接点を求めて

「宗教と科学の対立」が誤解であるならば、では、わたしたちは、宗教と科学の関係をどう考えたらよいのでしょうか。宗教と科学を考え直すためのポイントは次の点にあります。それは、科学は目的を達成するための方法や手段を与えてくれるが、科学はどんな目標をめざすべきかを教えてくれない、ということです。何ための科学技術なのか、科学技術を使って何をめざすのか。この科学の方向付けについて、宗教は発言を求められており、ここに、宗教と科学は協力の可能性があるのではないのでしょうか。

どこに接点を求めるのか。そのために、まず科学の役割と宗教との役割とを、両者を関係づけながら説明してみましょう。

カーナビの譬え

1 . どこに行くのかを決める、2 . カーナビに従って進む

どこに行きたいのかまで、カーナビまかせにはできない、カーナビはそこまで教えてくれない

これは、科学技術全般に当てはまることである。

何のための科学か。科学は人間の幸福のためにある。では、科学技術によって実現しようとする人間の幸福とは何か

これは、科学の具体的な営みにとって大切な問いであるが、しかし、科学自身が自らの科学理論に基づいて答えるという性格のものではない。

この点で、

宗教の役割は、支え合う人間関係の基盤として隣人愛によって科学に方向性を与えることであると言える。それに対して、

科学技術の役割は、隣人愛を具体化する手段を提供することにある。

こうして、本来宗教と科学はお互いに協力し合うべきものであることがわかる。これにゆいて、20世紀のもっとも有名な科学者であるアインシュタインは、次のように述べている。

「宗教と科学の諸領域はそれら自身において相互に明確に区別されるとしても、それにもかかわらず、両者の間には、強い交互関係と依存性が存在している。目的を規定する

のは宗教かもしれないが、宗教は、どの手段が自らの設定した目的に到達するのに寄与するかについて、もっとも広い意味において、科学から学ぶことができる。これに対して、科学は真理と理解への熱望を徹底的に吹き込まれている人々によってのみ創造されるのである。しかしながら、感情のこの源泉は宗教の領域から由来する。これには、現実存在の世界に妥当する諸規則が合理的である、すなわち諸規則は理性にとって理解可能である、との信念も属している。わたしは、この深い信念を持たないような本物の科学者など考えることができない。この状況は次のような比喻を用いて表現できるであろう。宗教のない科学はまっすぐ歩くことができず、科学のない宗教は行き当たりばったりである。」(ibid.,p.26)

Einstein[1939/40] : Albert Einstein, Science and Religion (I-1939; II-1940), in: Albert Einstein, *Out of my later years*, The Citadel press 1956 pp.21-30

3 . 具体例：環境論における宗教と科学

ここで、宗教と科学の協力を説明するための具体例として、環境問題を取り上げてみよう。

宗教と科学が、今実践的場において求められている実例として、環境問題を考える。

今、わたしたち人類が抱える問題はいろいろありますが、おそらくその最大のものの一つが環境問題であることを否定できる人はだれもいないのではないのでしょうか。温暖化、様々な汚染、ゴミ廃棄物、挙げればきりがなくらいです。

では、この深刻な環境危機を乗り越えて、21世紀も人類が人間らしく生きられる世界を守るにはどうしたらよいのでしょうか。皆さんはどう考えますか。これには、様々な意見があると思いますが、

環境危機を乗り越える二つの条件として、次の二つをあげることができるように思います。

1. 環境危機に対処する科学技術を開発すること

ごみ処理の技術、新しい二酸化炭素を排出しない安いエネルギーの開発などなど

2. 環境に優しい技術に価値を認め、環境に優しい行動をすること

技術革新でゴミ処理能力が2倍になっても、ごみの量が10倍になってもどうしようもない

ここで皆さんに考えていただきたいのは、一見、環境危機に対処できる新しい科学技術を開発するよりも、むしろ、ほんとうに難しいのは、多くの人間が一致して環境に優しく行動することだということです。わたしたちの身近には、頭では分かっている、行動できないことが多くあります。皆さんはそんな経験はないのでしょうか。バスに乗っているとき、気がつくと、そばにお年寄りが荷物を抱えて立っている場面を考えて下さい。皆さんはどう行動しますか、あるいはできますか。心では席を代わってあげるべきだ、代わってあげたいと思っても、何かなかなか行動できないという経験をしたことはないのでしょうか。また今年の夏は記録的な暑さでしたが、たとえばエアコンの温度設定を2度下げれば環境への負担が少ないことはわかっている、なかなか出来ない。よくあることです。

では、どうしたら環境に優しく行動できるのでしょうか。大切なことは、まず、一人一人が環境に優しいライフスタイルが、他の生き物との共生こそが素晴らしいということに

気づき、多くの人とその考えを共有することなのです。そして更に言えば、
欲望をコントロールして、共生するライフスタイルに積極的価値を見出すこと
(いやいや、無理してやるのではなく、自然に当然のこととして)
環境に優しいはかっこいい、という価値観を生み出すことが大切なのではないでし
ょうか。

ゴミの分別はかっこよい、ポイ捨てはださい、といった感覚です。これは感性の問題で
あり、ここに、まさに宗教の出番があります。神様が創造された共に支え合う世界、その
世界のすばらしさを聖書は教えています。宗教の役割は、環境に優しい行動できるような
感性を育て、みがくところにあるのです。

先に述べた、環境に優しい科学技術を目指すこと、そして経済のしくみに境への優し
さという視点を導入すること、この二つの条件を満たす取り組みが、今世界中で、とくに
この問題に目覚めた宗教によって、少しずつ実践されつつあります。

宗教は環境に優しいマインドを育て、科学はそれを実現する技術革新を行う。ここに科
学と宗教に求められる協力の具体的なあり方があるのではないのでしょうか。大切なのは、
それぞれがそれぞれの役割を自覚し協力すること。宗教と科学が、対立するのではなく、
むしろ協力し合うこと、これに人類の、地球の未来がかかっているといってもいいすぎで
はないでしょう。そのために、キリスト教には、過去の過ちを改め、新しく出発し直すこ
とが求められているのです。

というのは、キリスト教も環境問題に対して宗教として果たすべき役割を、これまで必
ずしも自覚してこなかったからです。すべては、未来に、つまり今大学で学んでいる皆さ
んの肩にかかっているのです。

4 . むすび

今日わたくしのは言いたかったことは次のようにまとめられます。

天地創造物語は人間が科学技術に使ってどんな社会を作って行くべきなのかというこ
と、つまり、文明の方向づけについて教えています。現代の環境危機という現実直面し
て、現代人には、過去の対立イメージを越えて、宗教と科学の新しい協力関係を生み出す
ことが求められているのではないのでしょうか。

わたくしの今日の話が、宗教と科学の対立という古い常識的な見方は間違っており、む
しろ今大切なのは宗教と科学の協力という新しい関係であること、このことを皆さんが考
える手がかりとなり、さらには、皆さんが環境に優しい行動の出来る人間になることの意
味に気づく手助けになれば、幸いです。

ご静聴ありがとうございました。